



司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。前回担当の西山俊彦神父様(小野原司祭の家)は、村田稔神父様(岸和田教会)にバトンタッチされました。

村田稔神父から この一冊



『司馬遼太郎で学ぶ日本史』(磯田道史、NHK出版新書、2017年、税込858円)

2020年度はコロナ禍で始まり、終息することなく新年度を迎えました。社会は閉塞され教会活動も中止になり、日曜日のミサにも参加出来ない大変な一年でした。しかしこの暗闇の中にも見つけたものは何かあったはず。以前は気づかなかったことや出来なかったことです。

とでした。情報時代と言われ、日々の情報は無数に入りながらも、なかなか歴史的、根本的な情報に出会えない寂しさがありました。それを乗り越える時間が与えられました。

教会にとって歴史的、根本的な書物は言うまでもなく聖書です。そして歴史を知るためには聖人伝に触れることだと思います。イエス様が好きになり、彼を好きになった人たちの歴史、教会の歴史を知ることです。これらをお薦めするのは当然ですので、少し邪道ですが、あえて歴史学者の本を薦めたいと思います。

むしろ、歴史の専門書ではなく、歴史小説が相応なされた司馬遼太郎さんの歴史小説から学ぼうという導入書です。大阪出身の司馬さんの歴史観、感受性も私たちに訴えるところが多いと思います。歴史学者の磯田さんのこの一冊を出発点として、莫大な司馬さんの歴史小説を一冊一冊読み続けていけば、現代の日本社会の流れの本質に出会えると思います。

磯田さんは以下の文章でまとめておられます。「司馬さんは、日本国家が誤りに陥っていくときのパターンを何度も繰り返して示そうとしましたが、その国の人々が持っている『くせ』『たがずまい』、簡単に言えば『国民性』といったものは、100年や200年単位でそう簡単に変わるものではないですね。であるならば、20世紀までの日本の歴史と日本人を書いた司馬遼太郎さんを、21世紀を生

次回、春名昌哉神父様(堺教会)です。



若者の読書感想文募集

- ① 年齢は35歳まで。カトリック信者、もしくはカトリック教会と何らかの関係がある方(カトリック校や諸施設の在籍者又は卒業生、保護者、関係者など)。
- ② 感想は400字程度。氏名、所属、顔写真(自由)を添えてメール(jiho@osaka.catholic.jp)か郵便にて送付(掲載にあたり編集する場合あり)。
- ③ 感想を送ってくださった方全員に教区オリジナルしおり(4枚組)を進呈。たくさんの投稿をお待ちしています。

●これまでの司牧者たちの「一冊」●

- ▶ 前田万葉大司教 『ユスト高山右近—いま、降りていく人へ』
- ▶ 酒井俊弘補佐司教 『道ありき<青春篇>』、『三十光年の星たち(上下)』
- ▶ 川邨裕明神父 『高山右近の生涯』
- ▶ 西山俊彦神父 『カカ・ムラドーナカムラのおじさん』、『焼けあとのちかい』

投稿記念

●教区オリジナルしおり●

「20世紀の聖人4人から現代の青年たちへのメッセージ」をイメージして作成。若い人たちの読書と勉強の友、日々の励ましと祈りへの招きになれば……という願いをこめて、投稿いただいた青年の皆さんにお送りします。



本紙3月号に投稿してくれた李光平さん(左、なみはや教会)と鈴木将樹さん(右、河原町教会・京都教区)

若者からの読書感想文

酒井俊弘司教推薦

『三十光年の星たち』

(宮本輝著)を読んで



大阪梅田教会
越知愛実

30歳前後の私にはとても考えさせられる本でした。若い時(20歳〜26歳ぐらい)は、ただその日その日が楽しいだけで良かったのですが、27歳ぐらいには将来について考えるようになってきました。

このままの人生で良いのか……将来の自分の姿が想像出来るか……など、たくさん考えることが増え、どうして行くべきかと悩んだりしています。

この本には、そのような若者の気持ちを書かれていて、自分のモヤモヤしている部分に少しでも光が見えました。今からでも三十年後の人生を見据え

る生き方ができたらと思いました。

若い主人公を助けた佐伯平蔵という登場人物のように厳しくも温かく見守る存在が、これから成長していく若い人たちの傍にいることがとにかく大事だと感じました。

酒井俊弘司教推薦

『道ありき<青春編>』
(三浦綾子著)を読んで



姫路教会
古川裕一郎

現在私は34歳ですが、本書を読んで昔の時代の人の生活や文化を考える良い機会となりました。

三浦さんの子ども時代には兄弟が多く、兄弟が亡くなることを通して人間の死というものを身近に感じたこと。戦前・戦後の教師という職業を信念を持って働いてきたからこ

そ、その現実には落胆して体調を崩し、婚姻の約束までした人との別れの決断をしたこと。このようにして、彼女の人格が形成されていく様子がうかがえました。

教師としての生活や婚約者との生活に終止符を打ち、人生に悩んでいた時に、信仰者との交流で三浦さんが信仰に興味を持ち、彼ら「写っていく」様子の描写が印象的でした。

私の家族の中でクリスチャンは私だけです。信仰者と言われる人たちが全てが素晴らしい人たちであると思いません。様々な出会いにより、彼女が教会に触れ、欺瞞さを持った人もいると感じたのは私の経験とリンクします。また、私の祖母は仏教徒で、祖父が亡くなった後に仏壇の前で題目を上げる姿などを見ると、祖母がクリスチャンではないから世の中の真理からはずれているとは思えない気持ちもあります。

に何も相談せずにカトリックの洗礼を受けた私は親近感を覚えました。

彼女の人生を見ていると立派なクリスチャンというよりは、自分の感情に正直な方だと感じました。彼女も私も模範的なクリスチャンというよりは人と接して精神的に成長していくタイプの人間なのかもしれません。前川正さんというクリスチャンの模範のような生き方をする方がもし私の前に現れたら、私も彼女のようになれるだろうか? と考えていました。

彼女を導く多くの人がいたからこそ、彼女は「道」を見つけたことができたように思います。私は洗礼を受けてまだ年月が経っていないのですが、私にもそのような「道」を示してくれるような方と多く出会える事を楽しみにしています。

感想文の投稿ありがとうございました!